『オリエント』第55巻第2号抜刷
2013年3月31日発行

前2世紀のユーラシア草原地帯東部における
馬の鬣の鋸歯状整髪を終焉

柳 生 俊 樹

2012

日本オリエント学会

前2世紀のユーラシア草原地帯東部における 馬の鬣の鋸歯状整髪を終焉

Disappearance of Crenelation of the Horse's Mane in the Eastern Eurasian Steppes of the 2nd Century B.C.

柳 生 俊 樹^{*}
YAGYU Toshiki

ABSTRACT On a number of reliefs, sculptures and wall paintings in ancient Eurasia, there occur representations of horses with crenelated manes. These represent a characteristic way of trimming of the horse's mane, which leaves the hair uncut at one, two or three places. This was "crenelation" by Otto Mäunchen-Helfen. This paper focuses on this way of trimming in the eastern Eurasian steppes.

Some archaeological remains of the eastern Eurasian steppes suggest that crenelation of the horse's mane was widely distributed before the 2nd century B.C. However, it is clear that crenelation disappeared in the 2nd century B.C. as there are no materials of that period showing the existence of crenelated mane, while there are representations of horses without crenelated manes. The author believes that the disappearance of crenelation is a very important fact to consider when reconstructing the history of the eastern Eurasian steppes.

It seems that disappearance of crenelation occurred simultaneously with the following phenomena in the eastern Eurasian steppes of 2nd-1st centuries B.C.:

1. Appearance of a composite bow covered with bone laths at the grip and ears, which was longer and more powerful than that of before the 2nd century B.C.
2. Appearance of copper cauldrons cast in a multi-piece mold, a casting method different from that of before the 2nd century B.C. These cauldrons were usually buried with a dead person, a custom is not confirmed before this time.
3. Disappearance of the motif of an animal whose hindquarters are twisted 180 degrees.

The author considers the disappearance of crenelation to be related to these phenomena. It is possible to say that changes dated to the 2nd century B.C. are related to rise of the Xiongnu and the subsequent unification of nomadic tribes in the eastern Eurasian steppes. Therefore, the disappearance of crenelation is very a useful fact to consider when reconstructing the early history of the Xiongnu, a period for which there are few material remains.

I. はじめに

絵画や彫刻等に描写された馬の鬣に、一箇所から数箇所の突出部が見られることがある。かつて、メ

^{*} 長野市埋蔵文化財センター専門員

Assistant Researcher, Center for Archaeological Research, Nagano City

(1) "crenelated" の訳語は、第一に「銃眼・狭間のある」である。メンヒェン＝ヘルフェンも "like the crenels of a wall" と表現しており (Maenchen-Helfen 1957, 85), 「銃眼」の語を含めるべきかもしれない。しかし, 「銃眼」からは, 「壁に空けられた穴あるいは窓」が想起されるし, 本稿で問題にする鬣の形状をイメージしにくい。そこで, 「凹凸状の, ギザギザの」の訳語もあることから, 「鋸歯状」と表現した。ただ, 実際には, 本稿で提示する図像がそうであるように, 鋸歯状とは言い難いものの方が多い。

ンヒェン＝ヘルフェン (O. J. Maenchen-Helfen) が “Crenelated Mane” と呼んだもので、一部に長い毛束を残しながら全体を短く刈ったり、部分的に束ねたりすることで、鬘を鋸歯状に整えたものである。⁽¹⁾ メンヒェン＝ヘルフェンの集成によれば、地域的には中国からヨーロッパまで、年代的には前 5 世紀から後 8 世紀まで、幅広い分布を見せる (Maenchen-Helfen 1957)。本稿は、そのうちユーラシア草原地帯 (以下、草原地帯)、⁽²⁾ 特にその東部の様相に注目するものである。以下、鬘を鋸歯状に整える方法 (メンヒェン＝ヘルフェンは “Crenelation” と表現する) を「鋸歯状整髪」⁽³⁾ と呼び、論を進めていきたい。⁽⁴⁾

鋸歯状整髪に対するメンヒェン＝ヘルフェンの考え方は、おおよそ次のようなものである。すなわち、1) 鋸歯状整髪には、装飾的な機能や、所有者 (あるいはその階層など) を明示するといった機能があった、2) 物理的な要請によるものでないなら、他人のそら似が量産される可能性は低いであろう、3) そこに着目すれば、鋸歯状整髪の空間的な広がり、地域間交流の結果とみなすことができる。こうした観点から、ユーラシアにおける鋸歯状整髪の展開を論じたのである (Maenchen-Helfen 1957)。

筆者も、以前から鋸歯状整髪に関心を持っていたが (柳生 2009)、今回は、メンヒェン＝ヘルフェンと同様の考え方に立ちながらも、視点を草原地帯東部に置いて検討してみた。⁽⁵⁾ その中で、草原地帯東部における鋸歯状整髪が、前 3 世紀までは広く行われていたものの、前 2 世紀以降は受け継がれない、という現象を見出した。この現象については、メンヒェン＝ヘルフェンも言及していないし、その後も問題とされてこなかった。しかし、筆者は、草原地帯東部の考古学研究における有用な手がかりのひとつと考えている。筆者の見解をここに披瀝し、問題提起の一文としたい。

II. 鋸歯状整髪に関する資料の提示

まず、鋸歯状整髪の初現から後 1 世紀頃までの草原地帯の資料と、関連する中国本土や中央アジアにおける資料を、図像資料に絞って提示する。⁽⁶⁾ なお、地図 (図 5) には、メンヒェン＝ヘルフェンが提示した資料で、ここでは詳述しなかった資料の出土遺跡も合わせて図示している。

1. 草原地帯

資料としては、メンヒェン＝ヘルフェンの集成と多くが重複する。ただ、一部に年代観の変更もあるので、既知の資料も改めて挙げておく。

i) フィリッポフカ (Filippovka) 1 号墳出土土器飾板 (図 1-1)

フィリッポフカ墓群は、ロシア西部のオレンブルク (Orenburg) 市から 100 km ほど西に位置している。1 号墳は最も大きな墳丘を持つ墓で、600 点以上の遺物が出土した。本例は、木製容器に装着された金製の飾板であり、騎馬人物を描写している。あまり写実の程度が高くないが、馬の鬘の中程に一箇

(2) 早い方の年代については、今となっては修正が必要である。メンヒェン＝ヘルフェンが最古の事例とみなしたものの年代観が変更され、かつ新たな資料が現れたためである。

(3) 本稿では、草原地帯を二大区分するが、アルタイ山脈から天山山脈を境界として行う。それらを境に、東方の標高の高い地域を「東部」とし、西方に広がる平原地帯を「西部」とする。

(4) 注(1)に示したような事情もあり、この用語が妥当かどうか疑問もある。適切な用語を確立するまでの仮称としたい。

(5) 草原地帯東部に絞ったのは、筆者が、目下、同地における匈奴の勃興過程の様相を研究テーマにしているからである。

(6) 山地アルタイのパジリク文化の墓では、凍結によってミイラ化した殉葬馬遺体が発掘されている。鬘を含む体毛が良好な状態で残っていた例もある (Rudenko 1953, 147-50)。ただ、鬘の状態について詳細な情報がない。今のところ、こうした実物資料は検討の対象から除外せざるを得ない。

所の突出部が見られる。

フィリップスカ 1 号墳は、後期スキタイ文化の遺物と比較できる資料の存在や、鉄製長剣の特徴から見て、前 4 世紀に位置づけられる (Pshenichniuk 2000, 29-30)。

ii) パジリク (Pazyryk) 5 号墳出土壁掛け (図 1-2)

1949 年、山地アルタイのパジリク墓群における 5 号墳で発掘された、フェルト製の壁掛けである。聖樹を手に椅子に腰掛けた女性に近づく騎馬人物を描写している。人物の乗る馬の鬣を見ると、項の部分と頸の中程に針状の突出部がある。

パジリク 5 号墳の年代は、かつては前 5-4 世紀とする見解が主流であり、メンヒェン=ヘルフェンもそれによっている (Maenchen-Helfen 1957, 135-136)。しかし、近年、新たに行われた放射性炭素年代測定によって、前 3 世紀半ばに造営されたとする見方が提唱された。前 3 世紀初め頃の中国本土製絹織物の存在から、考古学的にも矛盾はなく、筆者もそれを支持している (柳生 2011, 233)。壁掛けの製作年代も、前 3 世紀初めを大きく遡ることはないであろう。

iii) 樹下戦士紋帯飾板 (図 1-3)

エルミタージュ美術館収蔵の「ピョートル・コレクション」に含まれる二個一対の金製帯飾板である。倒置した B 形を呈し、樹木、3 人の男女、2 頭の馬を描写している。2 頭の馬のそれぞれの鬣に一箇所の突出部が認められる。

発見地不明品であるが、人物の服装から山地アルタイのパジリク文化と密接な関係が伺える。山地アルタイに近い地域で製作されたものであろう。年代的にも、上述のパジリク 5 号墳の壁掛けの年代に近く、前 3 世紀のものとなろう (柳生 2011, 231-232)。

iv) 騎射人物小像 (図 1-4)

エルミタージュ美術館収蔵品で、ミラー (G. F. Miller) によるシベリア調査行 (1733-1743 年) の際に、西シベリアで入手されたものという。疾走する馬にまたがり、弓を引く男性を描写する。高さ 3.6 cm の小さなもので、用途は不明。馬の鬣には、一箇所の突出部が認められる。

男性像は、服装や髪型が、樹下戦士紋帯飾板に描写された男性、あるいはパジリク 5 号墳出土の壁掛けに描写された男性のそれによく似ている (柳生 2011, 231-232)。それらと同時期、山地アルタイに近い地域で製作されたものであろう。

v) エシク (Esik) 市郊外発見灯明台 (図 1-5)

カザフスタン南東部、エシク市の近郊で 1953 年に発見された一括埋納品に伴ったもの。台に載った皿の上には胡座をかいた人物と、頭絡を装着した馬を象った装飾が付いている。この馬の鬣は、全体として毛足が短い、下方に一束の毛が見える。それによって、鋸歯状整髪を表したものと解釈する。人物像の特徴は、上述の樹下戦士紋帯飾板における男性像に対比できる。それによって、灯明台の年代は前 3 世紀代と考える (柳生 2011, 231-232)。

vi) 青銅製動物闘争紋帯飾板 (図 1-6)

一般に「オルドス青銅器」と呼ばれる、草原地帯の東端にあたる南モンゴリアのオルドス地域 (あるいはより広く中国の北辺) で採集された遊離遺物群の一例である。矩形透彫式で、周縁部には二重の縄目紋を有する。縄目の内側には、虎のような猛獣に襲われる馬が左右対称に描写されている。鬣には矩形の幅広い突出部があり、鋸歯状整髪が為されていると見られる。

現在まで、中国やロシアにおける考古学的調査によって数多くの帯飾板が発掘されているが、本例と

全く同じものは知られていない。ただ、周縁部の縄目紋は、前3-2世紀の中国本土における秦・趙・燕などの国々や、前漢王朝の中枢で造られた浮彫式の帯飾板にしばしば見られるものである。猛獣が草食獣を襲うという主題や、襲う側と襲われる側の双方ともが後脚を振り上げている点も同様である（小田木 2005, 83-87）。一方で、透彫である点は、中国本土で製作される帯飾板一般とは異なる特徴であり、むしろ草原地帯のそれとの関わりを示しているように思える。中国本土と草原地帯の折衷式と捉えられようが、オルドス採集という点から、ここでは一応、前3-2世紀の草原地帯東縁部の事例として挙げる。

vii) コシカ (Kosika) 出土鍍金銀製壺 (図1-7)

ロシア西南部、アストラハン (Astrakhan) 市北方 111 km のコシカ村で発見された中期サルマタイ文化の墓で出土した。猪形の把手が付く銀製壺である。器面には上下二段の紋様帯があり、上段には騎馬狩猟図が、下段には騎馬戦闘図が、それぞれ線刻によって描写されている (Treister 1997, Fig. 24, 28, 30, 31, 32)。上段の騎馬狩猟図は、保存状態が良くないが、槍を持った騎馬人物が猪を狩る光景を両側面に一組ずつ表す。一方の面における馬の鬣には、中程に突出部があることがわかる。下段の騎馬戦闘図は、一方の面に、重装騎兵が長い槍で軽装弓射騎兵を撃破する光景 (図1-7)、もう一方の面には、弓射騎兵と、矢を打ち込まれた馬を表している。ここに表された馬は、重装騎兵に撃破される軽装弓射騎兵の馬を除いて、鬣の中程に突出部が見えている。墓の年代は、ローマ系の青銅製容器の年代観から、前1世紀末から後1世紀代である (Treister 1997, 50)。従来、この時期のサルマタイ文化における鋸歯状整髪については、資料が欠けていたため、黒海北岸のケルチ (Kerch) におけるボスポロス王国の墓室壁画や貨幣にもとづいた推定が為されていた (Maenchen-Helfen 1957, 85-94)。本例によって、同時期の鋸歯状整髪の存在が確かめられることになった。

2. 中国本土

河南省洛陽市周辺で採集された空磚 (Maenchen-Helfen 1957, fig. 8, 9) に加えて、以下のような新資料がある。

i) 趙王陵二号陵出土青銅製馬像 (図2-1)

河北省邯鄲市の北には趙国の王陵が5つあるが、そのうちの二号陵で盗掘された器物群の中に全部で3体の青銅製馬像が含まれていた。鬣は、3体とも、沈線によって詳細に描写されている。公表された写真では明確ではないが、描き起こし図によれば、三箇所毛束が垂れ下がっているのが見える。

年代については、この青銅製馬像とともに盗掘された矩形の金製飾板が手がかりとなる。そこには、「三十一年」と判読し得る銘があり、趙国の恵文王 (前298-265年) の31年、つまり前268年に当てられる (趙, 李 2009, 92)。これによって、この青銅製馬像は、前3世紀の早くに製作されたものと考えられる。

ii) 始皇帝陵兵馬俑坑二号坑出土鞍馬俑 (図2-2)

兵馬俑坑は、陝西省西安市臨潼区、秦の始皇帝の陵墓の東 1.5 km に位置する。計4基の坑に将兵や馬の俑を並べ、全体として戦車兵、騎馬兵、歩兵からなる秦の軍団を再現している。以前にも紹介したように (柳生 2009)、このうち二号坑に配置された乗用馬の俑、「鞍馬俑」の鬣に鋸歯状整髪が見られる⁽⁷⁾。俑の製作時期は、始皇帝の死後か在位中かで意見が分かれる。いずれにしても、俑に見られる馬装には、前3世紀末の様相が反映されていることは間違いないであろう。

iii) 香山漢墓出土陶馬俑 (図 2-3)

2006年に山東省青州市で発掘された大規模な墓の陪葬坑から出土した。鋸齒状整髪⁽⁷⁾の存在を確認した馬俑は、脚部を欠損するが、長さ 52.1 cm、幅 21.3 cm と大型である。陶製の本体に、頭絡・鞍・房飾りなどを彩色によって描き加えている。鬣にも彩色が施され、首の中程には下方に垂れ下がる毛束が描写される。正式報告が未刊のため詳細がわからないが、墓は前漢前期に位置づけられている (王 2010, 22)。前 2 世紀代のものである。

前漢時代の馬の図像は数多いが、鋸齒状整髪の見られないものが一般的であるように思う。香山漢墓で出土した陶馬俑でも、全てにおいて鋸齒状整髪が見られるわけではない (九州国立博物館 2010, 21-22, No. 005)。本例は、例外的なものかもしれないが、メンヒェン=ヘルフェンの提示した洛陽採集の空磚⁽⁸⁾の図像と合わせて、中国本土における鋸齒状整髪が、前漢時代まで継続することを示す資料である。

3. 中央アジア

アフガニスタン、ベグラム (Begram) 出土の象牙製飾板 (Maenchen-Helfen 1957, fig. 24) に加えて、以下のような新資料がある。

i) オルラト (Orlat) 2 号墓出土帯飾板 (図 3-1)

ウズベキスタン、サマルカンド (Samarkand) 市の北西 50 km に位置する、オルラト墓地における 2 号墓で出土したもの。二個一対の骨製帯飾板である。平面形は馬蹄形を呈し、端部に V 字状の切り込みがある。一方の飾板には騎馬戦闘図、もう一方には騎馬狩猟図が描写されている。騎馬戦闘図では、全部で 5 頭の馬が描写されているが、2 頭の馬の鬣に、三角形あるいは四角形の突出部がある (図 3-1 左)。一方、騎馬狩猟図では、全部で 3 頭のうちの 2 頭の鬣に逆台形あるいは三角形の突出部がある (図 3-1 中、右)。いずれも幾何学的・非写実的な表現であるが、鋸齒状整髪⁽⁷⁾の存在を示している。

この帯飾板の年代については様々な意見があり、早くは前 2-1 世紀、遅くは後 4-5 世紀に置かれる。既往の年代観の中では、イリヤソフ (J. Ya Il'yasov) とルサノフ (D. V. Rusanov) の意見が最も説得力に富んでいる (Ilyasov & Rusanov 1997/98; Ilyasov 2003)。帯飾板の図像の特徴だけでなく、墓の形態や葬制、出土した土器、鉄剣、鉄鏃の型式などを多面的に検討し、前 1 世紀から後 1 世紀頃に置くものである。これによって、少なくとも後 1 世紀以降に下げる見解は否定される。

さらに筆者は、ここに描写された亜鈴形の銜留具、鞍や頬に付けられた房飾り、人物の携行するグリュトスの形態、人物の髪型などが、あとで述べる「物語的図像を有する帯飾板」(図 4-2, 3) に見られるものに似ることから、前 2 世紀代まで上がってもよいと考える。まだ検討を要するものであるが、早ければ前 2 世紀、遅くとも前 1 世紀から後 1 世紀と考えておきたい。

ii) タフティ・サンギーン (Takht-i Sangin) 出土象牙製飾板 (図 3-2)

タジキスタン最南部、アム・ダリヤ (Amu Darya) 右岸に位置するタフティ・サンギーン遺跡は、前 4 世紀頃から後 2-4 世紀まで存続したと考えられる都城址である。遺跡中央の神殿址から 2 点の象牙

(7) 以前、筆者は、鞍馬俑の鬣について、山口格 (2003) の言う「鬣束毛」が為されていると書いた (柳生 2009, 8)。しかし、今となつては、それは誤りであったと考えている。鞍馬俑に見られる鬣の整髪は、束ねるよりも刈ることで成り立っていることは明らかである。鋸齒状整髪に訂正させていただきたい。

(8) メンヒェン=ヘルフェンは、この資料を、ホワイト (W. C. White) の見解 (White 1939, 14-16) によって、前 3 世紀の例として提示している (Maenchen-Helfen 1957, 95-98)。しかし、林巳奈夫の年代観では、これらは前 1 世紀のものである (林 1992, 36-38, 79-80)。ここでは、後者によって前漢時代の例として言及している。

製飾板が出土した。元来は小箱を飾っていたものと考えられ、1点は完形、もう1点は破片であった。2点とも、騎馬狩猟図が線刻で描写されている。馬は、合計3頭描写されているが、そのうちの1頭の鬣に一箇所の突出部がある。

タフティ・サンギーンの発掘調査を統括するリトヴィンスキー (B. A. Litvinskii) は、この飾板の年代を後3世紀に置いた (Litvinsky 2001, 155)。しかし、筆者は、ここに描写された亜鈴形の銜留具、グリュトスの形態、人物の髪型などが、オルラト2号墓出土骨製帯飾板に見られるものと共通するため、早ければ前2世紀、遅くとも前1世紀から後1世紀と考えたい。

iii) ティリャ・テペ (Tillya Tepe) 3号墓出土垂飾 (図3-3)

アフガニスタン、シェベルガン (Sheberghan) 近郊のティリャ・テペ遺跡では、1978年に多数の金製品を副葬した墓が6基発見されたが、そのうちの3号墓において、互いに背を向けた馬の前軀を描写した金製垂飾が出土した。馬の鬣は、トルコ石の象嵌によって表現されている。項の辺りに矩形の突出部が認められる。

この墓では、ローマ皇帝ティベリウスの貨幣 (後16-21年鑄造) が出土している (Sarianidi 1985, 34)。したがって、ティリャ・テペ3号墓の造営年代は後16年を遡ることはなく、その副葬品も、おそらく早いものでは前1世紀代、遅いものでも後1世紀初め頃に製作されたと考えることができよう。垂飾の製作年代も、その範囲内に収まるものとなる。

III. 草原地帯東部における鋸歯状整髪を終焉

メンヒェン＝ヘルフェンは、パジリク5号墳出土壁掛けを、鋸歯状整髪に関する最も早い資料とみなした (Maenchen-Helfen 1957, 135-136)。しかし、パジリク5号墳の年代が遅く考えられるようになった今、前4世紀に位置づけられるフィリッポフカ1号墳出土例が最古の資料となる。中国本土や中央アジアでは、それより遅れて、前3世紀以後に現れる。初現の年代に修正が必要となったが、資料の新旧関係から見れば、鋸歯状整髪が草原地帯に起源を持ち、周辺地域へ広がったことについては、変更の必要はないであろう。それを踏まえて、草原地帯東部における鋸歯状整髪を展開を見ていこう。

1. 前2世紀までの鋸歯状整髪の変遷

草原地帯東部の鋸歯状整髪に関する資料は、山地アルタイとその周辺地域の例 (図1-2, 3, 4)、カザフスタン南東部のエシク発見例 (図1-5)、伝オルドス採集例 (図1-6) があるが、数量的にはわずかである。とはいえ、前3世紀段階で中国本土にも伝わっていることから (図2-1, 2)、その前提としての草原地帯東部における広がりを見出すことは許されよう。また、鋸歯状整髪が出現する頃の中国本土では、草原地帯の文化的影響が指摘される資料が出土することがある。前5世紀頃から発達した軟式鞍 (林 1996) や、独特の動物紋・怪獣紋 (喬 2004) などであるが、いずれの資料も、隣接する南モンゴリアの文化を経て山地アルタイにつながっていく要素である (e. g. Rudenko 1953)。鋸歯状整髪の変遷にも重なるところがある。こうした様相を考慮すれば、前3世紀の草原地帯東部では、直接的な資料は乏しいが、実際には鋸歯状整髪が広く行われていたと見てよいであろう。

これに対して、前2世紀以降の様相はどうであろうか。前2世紀以降の資料としては、草原地帯西部におけるコシカの例 (図1-7)、中国本土 (図2-3)、中央アジアの諸例 (図3) がある。以上の地域では、鋸歯状整髪の変遷が、前2世紀以降も継続していることは明らかである。

ところが、草原地帯東部では、前2世紀以降に位置づけられる資料が存在しない。草原地帯東部では、鋸歯状整髪⁽⁹⁾の習俗が受け継がれなかったと考えられるのである。このことは、別の資料からも裏付けることができる。

2. 鋸歯状整髪⁽⁹⁾の不在を裏付ける資料

草原地帯東部においては、前2世紀に位置づけられる馬の図像資料がある。それらが、鋸歯状整髪⁽⁹⁾の不在を裏付ける資料となる。

i) 物語的図像を有する帯飾板（図4-1, 2, 3）

倒置したB形や矩形、まれに馬蹄形を呈する透彫式帯飾板で、おそらく英雄叙事詩などを題材とした図像を描写する。遊離遺物であるが、サックラー・コレクションの例（図4-1）や、ピョートル・コレクションにおける騎馬猪狩紋帯飾板（図4-2）が典型である。他にも、後述するような発掘例・採集例がある。そこでは、樹木や人物に加えて、馬が描写されている。細部があまり明確でない場合も多いのであるが、少なくとも鬣に突出部がないものばかりである。

この種の帯飾板の地域的・文化的帰属については、発掘例や採集地のある程度わかる例の蓄積によって明らかになってきた。発掘例としては、中国陝西省西安市の西南に位置する客省莊140号墓（図4-3）や、寧夏回族自治区の同心県倒墩子墓地10号墓（寧夏文物考古研究所他 1988, 図版十六-3）にある。遊離遺物であっても発見地のわかる例としては、内蒙古自治区のオンニユド（Ongniud）旗の2点（虎 1998, 図五-1, 2）、遼寧省西豊県の西岔溝墓地の2点（孫 1960, 図17）などがある。つまり、中国北辺に分布のひとつの中心が認められるのである。より北方では、今のところ発掘例はなく、採集地を限定できる例もない。ただ、より北方への展開を示唆するデータとして、金属組成の相違がある。サックラー・コレクションの例（図4-1）は砒素を含んでいるが、それは、通常、中国北辺ではなく、北モンゴリア、東シベリアあるいは南シベリアの青銅器の特徴である（Bunker et al. 1997, 276）。これに加えて、人物や馬とともに描写される樹木は滴形の窪んだ葉を持つが、同じ特徴の樹木が描写された帯飾板が、中国北辺のみならず、北モンゴリア、ザバイカリエ（Zabaikal'e）、ミヌシンスク（Minusinsk）盆地で少なからず知られている。こうしたことを総合すると、「物語的図像を有する帯飾板」は、中国北辺のみならず、より広く草原地帯東部に特徴的といつてよいであろう。

年代については、倒墩子墓地における前118年初鑄の五銖銭との共伴（寧夏文物考古研究所他 1988, 354）などから、前2世紀末から紀元前後を含むことが確実となった。さらに、B形の例（e.g. 図4-1, 2）などは、草原地帯における前3世紀代の帯飾板（e.g. 図1-3）の形態を踏襲しているので、前2世紀でも早いほうに遡るであろう。ここでは、前2-1世紀と考えておきたい。

以上によれば、物語的図像を有する帯飾板に描写された馬の図像には、草原地帯東部における前2-1世紀の馬文化の特徴が反映されていると考えてよい。したがって、前2-1世紀の草原地帯東部における鋸歯状整髪⁽⁹⁾の不在を窺う資料となる。

ii) ノヨン・オール（Noyon Uul）6号墳出土壁掛け断片（図4-4）

ノヨン・オール（ノイン・ウラ）遺跡は、モンゴル国の首都ウランバートル（Ulaanbaatar）の北方122 kmに位置する大規模な墓群である。1924-25年にロシアの探検家コズロフ（P. K. Kozlov）が発掘し、

（9） 図像の主題からすれば、樹下戦士紋帯飾板（図1-3）もこの中に含まれる。しかし、人物や樹木など細部の特徴が、今ここで問題にしている一群のものとは異なるので、区別される。

豊富な出土品で知られている。6号墳は中でも出土品が多く、前漢の建平五年（前2年）銘を有する漆器耳杯を含んだ、紀元前後あるいは後1世紀初め頃の墓である（梅原 1960）。

元来この墓の壁を飾っていたと思われる毛織物断片がいくつかあり、その中に馬と人物の図像を刺繍したものがある。馬の図像は、合計4頭分が残存している。いずれも鬣が短く刈り整えられているようであるが、そこに明らかな突出部は見られない。

ノヨン・オールで出土した各種織物は国際色に富んでいるが、本例に関しては、在地の文化の所産と考えられる。人物の服装や髪型に、上述の、物語的図像を有する帯飾板に見られるものと似たところがあるためである。したがって、本例も、前2世紀以降の草原地帯東部における鋸齒状整髪の不在を窺う資料とすることができる。

3. 鋸齒状整髪を終焉

以上のように、前2世紀以降の草原地帯東部では、鋸齒状整髪に関する資料そのものがないだけでなく、鋸齒状整髪の見られない馬の図像が存在する。これらによって、鋸齒状整髪は、前2世紀以降、草原地帯東部では行われていなかったと考えてよい。前2世紀以前の様相と比較すれば、それは鋸齒状整髪を終焉と捉えることができる。

IV. 鋸齒状整髪を終焉の資料的意義

草原地帯東部に固有の鋸齒状整髪を終焉という現象をどのように評価すべきであろうか。その際に注目されるのが、草原地帯東部の資料に見出すことができる前2世紀を境にした変化である。いくつかを挙げておこう。

i) 弓 矢

前3世紀以前の草原地帯東部では、長さ100cmほどの比較的小さな弓が用いられていた。しかし、前2世紀以後、中央部と両端を骨角製の板で補強した、長さが150cmに達する長大で強力な弓が用いられるようになった（高濱 2010）。また、弓矢を持ち運ぶゴリュトスの佩用位置も変化しているようで、早い時期には左側（図1-2）、前2世紀以降は右側（図3-1, 2；図4-2）になっている。筆者の推測に過ぎないが、射法などにも変化があった可能性がある。

ii) 鍔

儀礼あるいは日常生活用の煮沸具である鍔にも、前2世紀以前と以後では異なる様相が認められる。特に製作技法に顕著であって、前2世紀以前は矢蟬法のような技法で製作されたが、前2世紀以後は、中国本土の青銅器製作技法のような分割式の范を用いた方法に変わっている。また、鍔の使用形態にも変化があった可能性が高い。前2世紀以前の資料は遊離遺物あるいは埋納遺物であることが多いが、前2世紀以降のそれは墓に収められたものが多くなるからである（高濱 2011；畠山 2011；柳生 2011）。

iii) 捻体形動物紋

後半身を実際には起こりえない形に捻った姿で表された動物の紋様を、筆者は「捻体形動物紋」と呼んでいる（e.g. 図1-6）。山地アルタイ周辺に起源を持つもので（池田 1970, 31-32）、前4-3世紀を通じて東西に伝播していく。しかし、前2世紀になると、草原地帯東部では捻体形動物紋が見られなくなる。さらに詳しい検討が必要であるが、捻体形動物紋の展開の仕方も、上述の事例のそれと共通する可能性がある。

本稿で明らかにした鋸歯状整髪を終焉という現象は、地域的・年代的に見て、こうした現象と同種のもと考えてよいであろう。では、その背景としては何が考えられるのか。

地域や年代から考えれば、前200年頃の匈奴の勃興と草原地帯東部の政治的統合に関わる歴史的環境の変化が、考古資料に見られる変化の背景に相応しいであろう。匈奴の、特に初期の動向に関わる現象が抽出できるとすれば、その意義は大きい。これまで発掘された匈奴に関連付けられる遺跡は、いずれも前2世紀の遅い段階、あるいはそれ以降のものである。前2世紀初めの遺跡は未だに見つかっていないために、匈奴の勃興過程など、東ユーラシア史にとって重要な課題への取り組みが困難になっている。そのような状況下では、匈奴の統合以前・以後に渡る資料を検討し、草原地帯東部の地域的動向を把握することが重要となる。その積み重ねが、匈奴史を考古学的に解明することにつながっていくであろう。その素材として、本節で述べた諸現象があるのである。

さらに、終焉という現象に注目することで、鋸歯状整髪もそれに加えることができる。匈奴の考古学的に歴史を考えていく手がかりがひとつ増えたことになる。その点、鋸歯状整髪に改めて注目する価値がある、と筆者は考える。本稿で、鋸歯状整髪を取り上げた所以である。

V. おわりに

本稿では、1) 草原地帯東部において、前3世紀には広く行われていた鋸歯状整髪が、前2世紀で終焉を向かえたことを指摘し、2) 弓矢の変化、鍔の鑄造技術や使用形態の変化、捻体形動物紋の消長といった同時期の諸現象の中に位置づけた、3) それによって、鋸歯状整髪を終焉という現象が、不明な点の多い早い時期の匈奴文化の考古学的研究に有効ではないかと考えた。

草原地帯東部を中心として検討することで、鋸歯状整髪の分析に新たな意義を見出すことができたと考ええる。推測に推測を重ねた部分も多いが、今後の研究の出発点になればと思いあえてまとめた次第である。識者の御叱正を仰ぎたい。

参考文献

- Aruz J. et al. (eds.) 2000: *The Golden Deer of Eurasia: Scythian and Sarmatian Treasures from Russian Steppes*, New York.
- Bunker, E. C. et al. 1997: *Ancient Bronzes of the Eastern Eurasian Steppes from the Arthur Sackler Collections*, New York.
- Chuvín, P. et al. 1999: *Les arts de l'Asie centrale*, Paris.
- Ilyasov, J. Ya. & D. V. Rusanov 1997/98: "A Study on the Bone Plates From Orlat," *Silkroad Art and Archaeology* 5: 107-159.
- Ilyasov, J. 2003: "Coverd Tail and "Flying" Tassels," *Iranica Antiqua* 38: 259-325.
- Litvinsky, B. A. 2001: "The Bactrian Ivory Plate with a Hunting Scene from the Temple of the Oxus," *Silkroad Art and Archaeology* 7: 137-166.
- Maenchen-Helfen, O. 1957: "Crenelated Mane and Scabbard Slide," *Central Asiatic Journal* 3, 85-138.
- Pshenichniuk, A. 2000: "The Filippovka Kurgans at the Heart of the Eurasian Steppes," in J. Aruz et al. (eds.), *The Golden Deer of Eurasia: Scythian and Sarmatian Treasures from Russian Steppes*, New York, 21-30.
- Rudenko, S. I. 1953: *Kul'tura naseleniya Gornogo Altaya v skifskoe vremya*, Moskva/Leningrad.
- Salmony, A. 1933: *Sino-Siberian Art in the Collection of C. T. Loo*, Paris.
- Sarianidi, V. 1985: *The Golden Hoard of Bactria: From the Tillya-tepe Excavations in Northern Afghanistan*, Leningrad.
- Treister, M. Yu. 1997: "New Discoveries of Sarmatian Complexes of the 1st Century A. D.: a Survey of Publicatins of VDI," *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia* 4/1, 35-100.

White, W. C. 1939: *Tomb Tile Pictures of Ancient China: An Archaeological Study of Pottery Tiles from Tombs of Western Honan, Dating about Third Century B. C.*, Tronto.

池田厚史 1970:「捻体形動物意匠について」『Museum: 東京国立博物館研究誌』231, 22-34.

梅原末治 1960:『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』東洋文庫.

王燕玲 2010:「山東青州香山漢墓出土彩繪陶俑初探」『文物春秋』2010/10, 22-28.

小田木治太郎 2005:「北方系長方形帶飾板の展開: 西安北郊秦墓出土鑄型の分析から」『中国考古学』5, 79-94.

九州国立博物館(編) 2010:『馬: アジアを駆けた二千年』(展覧会図録)九州国立博物館.

喬梁 2004:「中原, 南方所見匈奴文化影響」山東大学東方考古研究中心(編)『東方考古』第1集, 科学出版社, 276-289.

孫守道 1960:「匈奴“西岔溝文化”古墓群的發現」『文物』1960/8-9, 25-35.

高濱秀 2010:「中央ユーラシアの複合弓: 匈奴勃興以前の草原地帯東部を中心として」『金沢大学考古学紀要』31, 31-43.

高濱秀 2011:「中国の鍔」草原考古研究会(編)『鍔の研究: ユーラシア草原の祭器・什器』雄山閣, 9-93.

田辺勝美, 前田耕作(編) 1999:『世界美術大全集東洋編第15巻: 中央アジア』小学館.

中国科学院考古研究所(編) 1962:『豊西発掘報告: 1955-1957年陝西長安県豊西郷考古発掘資料』文物出版社.

趙建朝, 李海洋 2009:「河北邯鄲趙王陵二号陵出土的戰国文物」『文物』2009/3, 89-94.

寧夏文物考古研究所他 1988:「寧夏同心倒墩子匈奴墓地」『考古学報』1988/3, 333-356.

畠山禎 2011:「シベリアの鍔」草原考古研究会(編)『鍔の研究: ユーラシア草原の祭器・什器』雄山閣. 119-190.

林俊雄 1996:「鞍と鍔」『創価大学人文論集』8, 53-97.

林巳奈夫 1992:『石に刻まれた世界: 画像石が語る古代中国の生活と思想』東方書店.

プガチェンコワ, G. A. 他(編) 1991:『南ウズベキスタンの遺宝: 中央アジア・シルクロード』創価大学出版会.

龐昊 1998:「翁牛特旗發現兩漢銅牌飾」『文物』1998/7, 42-43, 78.

柳生俊樹 2009:「兵馬俑博物館における鞍馬俑の観察」『金大考古』63, 7-10.

柳生俊樹 2011:「天山北方地域における前1千年紀の鍔」草原考古研究会(編)『鍔の研究: ユーラシア草原の祭器・什器』雄山閣, 191-253.

山口格 2003:「束毛概念の設定: 馬具と馬装の基礎的考察2」文化財学論集刊行会(編)『続文化財学論集: 水野正好先生古稀記念論文集』奈良大学文学部考古学研究室, 261-270.

図出典

図1

1: Aruz et al. 2000, No. 24 転載; 2: 田辺, 前田 1999, 図版56 転載; 3: 田辺, 前田 1999, 図版60 転載; 4: Chuvín et al. 1999, Pl. 22 転載; 5: Chuvín et al. 1999, Pl. 16 転載; 6: Salmony 1933, Pl. XXII-4 転載; 7: Treister 1997, Fig. 29 転載

図2

1: 趙, 李 2009, 図二-1, 4 転載; 2: 筆者撮影(兵馬俑博物館); 3: 九州国立博物館 2010, 22, 上 転載

図3

1: プガチェンコワ他(編) 1991, 図版244, 245 転載; 2: Litvinsky 2001, Fig. 3 転載; 3: Sarianidi 1985, Pl. 40 転載

図4

1: Bunker et al. 1997, No. 243 転載; 2: 田辺, 前田 1999, 図版62 転載; 3: 中国科学院考古研究所 1962, 図版103-5 転載; 4: 梅原 1960, 図版第一転載

図5

筆者作成

1. フィリップボファ1号墳出土金製飾板

2. バジリク5号墳出土壁掛け

3. 樹下戦士紋帯飾板

4. 騎馬人物小像

5. エシク発見灯明台

6. 動物闘争紋帯飾板

7. コシカ出土鍍金銀製壺

図1 草原地帯における馬の鬣の鋸歯状整髪

1. 趙王陵二号陵出土青銅製馬像

2. 兵馬俑坑二号坑出土鞍馬俑

3. 香山漢墓出土陶馬俑

図2 中国本土における馬の鬣の鋸歯状整髪

1. オルラト2号墓出土帶飾板

2. タフティ・サンギーン出土飾板

3. ティリャ・テペ3号墓出土垂飾

図3 中央アジアにおける馬の鬣の鋸歯状整髪

1. 青銅製帶飾板 (サックラー・コレクション)

2. 金製騎馬猪狩紋帯飾板

3. 客省荘140号墓出土青銅製帶飾板

4. ノヨン・オール出土壁掛け断片

図4 草原地帯東部における前2世紀以降の馬の図像

図5 関連遺跡地図